

---

# 裏表

竜頭蛇尾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

裏表

### 【Nコード】

N2967E

### 【作者名】

竜頭蛇尾

### 【あらすじ】

性格の裏表。表は大体が良い人であったり、自分の考えもしない人であったりする。では、裏の性格は・・・？性格の変化する少年のファンタジー小説。

## 第一の足跡 始まりの夏

これは暑い夏の日のこと。甲高いせみの鳴き声が辺り一帯に響いている。脳天にまで響くようなうるさい声は暑さに苦しむ人々をさらに苦しめているだけだった。

「・・・」

そんなことを考えていても、暑さはどうにもならない。と、少年は買い物袋を両手に持ち、帰り道をただひたすらに歩いている。足取りは重く、まるで幻にでも会ったようにふらふらとしている。帰り道はレンガ通りだが、なんだかよく分からない機械がその辺の空中や道路を進んでいる。あ、もうだめかも。

「ちよつと!」

せみのような甲高い声ではないが、うるさい女の声が脳天に響く。  
「う・・・ん?」

「つたく、買い物の途中で倒れてこないでよね・・・配達の中に  
見つけてよかったものの・・・」

「・・・倒れてたのか?」

確認を求めながら少年は、自分の額に手を触れる。冷たい何かに触れたようで、手が一瞬にして冷やされた。「頭に熱を下げるシートでも貼ってあるんだろう」と少年は思ったが、触り心地で氷単品が額に乗せてあることが分かった。

「そうよ。ちよつとここから100m先ね。私の空中配達便の途中にたまたま寄ったら倒れてるんだから」

「ああ、もう倒れてたことは分かったから。まあありがとな。お礼」  
少年は寝ていたソファから立ち上がると、自分が持っていた買い物袋からアイスバーを取り出し、うるさい女に投げた。コントロールが最悪だったが、なんとか女の目の前付近に投げることができた。

しょうがないさ、俺は文科系だから。

変な納得をしながら少年は自分もアイスを手を取った。あずきばーだ。うるさい女はもう口に半分以上アイスバーを入れている。一気に食ってしまうつもりなんだろう。

「ひゃあわはひはいふね」

じゃあ私は行くね。あくまでこれを日本語として捕らえ、なおかつ少年に対する言葉だとして日本語で訳した場合こうなる。

「おう、またな」

うるさい女は、この家の扉を丁寧に内側から押して出ていった。女の行動を丁寧に直した場合にのみこう伝えられる。どこからどう見てもぶっ壊して出ていったようにしか見えないからだ。しかも蹴りで。

「・・・今日の仕事は午後から移動か」

少年は、ぶっ壊された扉を簡単に修理・・・いわゆる応急処置をし、企業に連絡し、明日には修理に来てもらえるように頼んだ。そして、一枚の紙切れをじーっと見ている。広々とした部屋がこの家のリビングとなっている。天井までの高さは優に10mを超す。そして、巨大なテーブルが中央を占領し隅っこにソファがいろんなどころに置いてある。

そんな部屋で、ソファに寝転びながら少年は紙を見ている。

「さて、まだ時間があるな・・・ゲームするのも嫌だし、向かうついでに飯でも食ってくかな」

少年は応急処置された扉の下をくぐり外へ出た。外は相変わらずの暑さだった。

「カルボナーラ一つ、お願いします」

「かしこまりー」

店の注文をとる人が、常人には考えられないスピードでメモを取る。わずか1秒。そして、それを風の流れに乗せて厨房へ運んだ。さて、どういふことかこの街は暑くない。さきほどの通りとは大違いで逆に寒いくらいだ。人々は体を縮こまらせて歩いてるし、屋気楼のようなじわじわとした感じがしない。表現の仕方が幼いとか言わないでほしい。まだ少年、いや自分は青年なのだ。外見的に見たらの話だな。

「お待たせしました。カルボナーラです」  
「ありがとう」

注文をとる人は再び厨房に入り、皿を洗ったりスープの加減を見たりと大忙しだ。出されたカルボナーラは出来立と思えるタバスコの香りが・・・たばすこ？

「やっぱすごいよね。タバスコとかキムチって。どんな料理でも合うからね」

さて、いつ現れたのか知らないのは少年だけで、注文をとっていた人も先ほど「いらつしゃいませ」と言っていた。地面から2、3cm浮いているバイクのようなものを椅子の横に止め、先ほどのうるさい女がその椅子に座っていた。ちょうど、少年の向かい側だ。  
「俺のカルボナーラに何してんだ、てめえ!!」

「美味しくなるようにトッピング」

「ありえねえよ! カルボナーラという完全体にタバスコという変なウイルスまがいなものぶち込まれて何で良くなるんだよ!!」

「そのしゃべり方がいい加減直したら? 比喻表現もりだくさんなしやべり方」

女はそう言いながら「ウイルス」のせいで赤く変化したカルボナーラを、フォークで巻き取り口に入れた。少年は、そのカルボナーラを見ながらかなりうるさい歯軋りをしていた。目はカッと開き、かなり変化した形相で女をにらみつけている。

「そろそろ仕事の時間でしょ」

スルスル口の中へ吸い込むように流しいれた女は、にらみつけて

いる少年にそう告げたのだが・・・少年の方は一向に直ろうとしない。

「そうだけどな・・・お腹が・・・」

「ほらほら。仕事の場所まで送ってくから」

「・・・むう」

宙に浮いているバイクにうやむやにされた少年はまたがり、お金をテーブルに置いた。うるさい女は「お金ここに置いときますねー！！」とこれまたうるさい声で店内に向けて叫んだ。注文をとる人がお金を取りにテーブルに近づいたとき、その目の前には土煙が立ち込めていた。

## 第二の足跡 街と町の試合

「兄貴、今日の仕事内容はなんですかい？」

大柄な男が木でできたオンボロの椅子に座りながら、ビールジョッキを口に運ぶ。分かっているのに質問された「兄貴」と呼ばれた男は確認を取るためだと考えてこう告げた。

「試合」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「お前は試合を試合と認めないのか？」

「そこまで屁理屈言われても俺は対抗できないっすよぉ」

ビールジョッキをこれまたオンボロなテーブルの上にドシンツとまるで叩きつけるかのように置いた。大柄な男は、椅子から立ち上がりその辺に置いてあった刃が鋼で出来た剣を取り、素振りを始めた。「兄貴」と呼ばれた男は、オンボロな椅子に座りながらこつくりこつくりとうたた寝している。

「まあ、相手がなんであろうと兄貴とおいらの力で倒すだけですけどねえー！！」

剣を斜め上に構えて大柄な男はそう叫ぶ。「兄貴」と呼ばれた男の顔がその声と共に、にやりと一瞬にやけた。

「今日の仕事の内容は何なのよ！」

「・・・試合」

「何で試合なの」

「知らんよ。街同士の戦いらしいけどな」

「・・・あんたよくそんなのに巻き込まれて平気よね」

「別にいいんだよ。俺に影響はないし」

そう、俺には関係ない。仕事で試合をするとしても任務として頼まれただけである。まあ、受注するときに責任転換は出来上がって

るけど。もちろん街側に。

少年と少女は軽やかに、それでいて豪快に突き進むバイクに乗りながら南の方角へと進んでいる。待ち行く人々がまるで珍現象でもみるみたいな目でバイクを見ている。まあ、それも仕方ない。この街にそんな技術は無いんだから。

「うん、試合会場はその闘技場」

指を刺した少年の言うとおりに、少女はバイクを起用にコントロールしかなり無駄なドリフトターンをしながら、闘技場の前にバイクを止めた。バイクはウンウンとうなり、周りの土を吹き飛ばしている。でかいな。闘技場の大きさは、家一軒丸ごと入る。・・・と考えると小さかった。

「じゃ、がんばってね。報酬出るんでしょ」

「・・・出ても『こいつ』のゲーム代で消えそうだな」

少年は『こいつ』と言いながら自分を指差していた。おかしい話だが、少女は別になんとも無い様子で「そうね」とあいづちを打つ。静かな風の流れが二人の周りの土埃を、闘技場の中へ吸い込まれるように運んでいた。その風の流れに少年はそのまま乗るように足を動かしていた。少女の心配そうな顔を少年は知るよしもなかった。

闘技場の内部構成は案外しっかりしていた。まあ闘技場としてはしっかりしていたのだが、街と町の決闘の為にはいくらなんでもここまでの闘技場は使わなくてもいいだろうと少年は思っていた。しかし、不吉なことはこんな立派な闘技場を使うということは、相手はまさかの冒険者が歴戦の勇者か、激戦の戦争真っ只中を生き抜いてきた戦士なのか、かなりの修行を積んで恐るべき魔法を備えた『魔術師』なのか。少し怖くなってきた。

受付のところでエントリーを済ませると、控え室へ案内された。なんとも言えない緊張の雰囲気漂っていた。

「ええ、みなさまハンカチ、空き缶、また座布団など。別に投げる



べきものとして持つてくるものではありませんので、一切私に投げないよう・・・お願い申し上げます」

闘技場の中心で審判なのか、司会者なのか、実況中継者なのかよく分からない男がマイクを片手で思いつき握り締めて語って（？）いる。控え室まで声が届いているぞ。はつきり言えばうるさいということ。しかしながら、町の決闘でここまでお金を入れるとは我が町もついに本気か。それとただ、お金の無駄遣いが好きなのか。どちらにしても俺には関係ない。

「それでは、お客の人数も増えてきたところで選手の紹介と参りましょう！」

「・・・さて、いつ『チェンジ』するか」

少年は控え室のベッドに座り、そして足をブラーンとさせながらそうつぶやいた。闘技場の声も十分響くが、少年ただ一人がいる控え室には少年の声の方がより響いた。静かといえば静かな控え室だ。「東の街『旅人の街』代表・・・東の街では有名にも有名な二人の戦士！『悪魔のコンビ デビルブラザーズ』です！」

司会者はおそらく東の街出身だろう。他の街からの戦士を呼ぶのにあそこまで高らかと誇りを持って宣言するだろうか？ 普通はしないだろう。最低限、知り合いであることが司会者の発言に必要なことだ。

「続いて、西の町『異界の町』代表・・・無名といわざるを得ない、その名を『機車 コンビ』！」

少年は、その呼び名と共に体をベッドから下ろし、少しだけ準備運動をしてから闘技場の中心へ向かった。少しぺたぺたと響く廊下を一心不乱に少年は歩く。光が見えてきた。少々の罵声が聞こえるが気にしない。おそらく準備運動をしていたせいだろう。

光が少年を照らす。歓声と罵声の入り混じった声の中に細々としたマイクを持った人と、身の丈を超える剣を持った人、そして、その隣に赤いローブを身にまとった人が立っていた。

「・・・あ、あれ？ この試合は二人のコンビ対決では・・・？」

ええー実況の私も少し戸惑っています」

「大丈夫ですよ。後で『来ます』から」

「そ、そうですか。では、ここは正式ルールに則って……タイムで」

「いいえ、別に二人でかまいません。その方が『あいつ』もめんどくさくないと思うので」

「おおっと！ これはかなりの自信満々な発言だ！」

「……てめえなんかめてんじやねえのか？ ああ？」

大柄な男が剣を肩で持ったまま近づいてくる。

「いいですよ。本当に。ただし……怪我するかも」

「・・・一応、ルール上は相手が行動不能になればいいんです、その辺は私が中断を入れます」

「そうですか。なら安心ですよ」

「その自信のほど、しかと見届けるべきものだな」

ローブをまとった人がいきなりしゃべり始めた。そして、実況の人声を高らかと上げてこう言い放つ。

「それでは『旅人の街』VS『異界の町』の対決です!! 試合開

始  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
つ  
!  
!  
!  
!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2967e/>

---

裏表

2011年1月23日14時56分発行